

江戸期における浄土宗と真宗の論争

—— 論争の発端について ——

星 俊明

1 / 問題の所在

江戸期において浄土宗^①と真宗^②の間では、法然浄土教の正統をめぐる盛んな教義論争が行われた。しかしそれらの論争は近代以降の思潮の変化に伴い、過渡的・前時代的なものとして扱われたことによつて、多くの検討課題を残したまま今日へと至っている。

先行研究では近世の浄土宗・真宗間の論争について「論争の発生原因のほとんどが浄土宗側の論難によるものである」と指摘されている。本稿ではこの指摘について、各論争の内容および発生過程を再考察し、検討・反証を行いたい。

《江戸期における浄土宗と真宗の論争》

① 『聖徳太子日本国未来記』をめぐる論争

慶安元（一六四八）年、四天王寺の宝物庫より発見されたとされている『聖徳太子日本国未来記』における真宗・親鸞批判がきっかけで発生した論争。

② 『親鸞邪義決』をめぐる論争

寛文初め頃（一六六一）に流布した『親鸞邪義決』における親鸞を一念義の法流（＝邪義）とする記述がきっかけで発生した論争。

③ 『翼賛遺事』をめぐる論争

享保年間（一七三〇頃か）に浄土宗の義山によって著された『翼賛遺事』における親鸞を一念義の法流とする記述がきっかけで発生した論争。

④ 『円戒念仏一致章』をめぐる論争

享保一五（一七三〇）年に真宗の祐應によって著された『円戒念仏一致章』における浄土宗の円頓戒に対する批判がきっかけで発生した論争。

⑤ 『茶店問答』をめぐる論争

明和五（一七六八）年に真宗の秀円によって著された『茶店問答』における浄土宗批判がきっかけで発生した論争。

⑥ 「宗名論争」

安永三（一七七四）年に真宗側から寺社奉行に提出された「浄土真宗」という公称を願い出る『口上書』がきっかけで発生した論争。

⑦ 「大日比宗論」

文化八（一八一二）年、真宗門徒の中野玄蔵が『専修念仏自得抄』を著して浄土宗の法岸に批判を行ったことがきっかけで発生した論争。

《主な先行研究》⁽³⁾

杉紫郎氏「真宗対浄土宗論史の梗概」(一九二一)⁽⁴⁾

結城令聞氏「宗論と本派宗学」(一九八二)⁽⁵⁾

坪井俊映氏「浄土宗と真宗との論争」(一九八二)⁽⁶⁾

深川宣暢氏「親鸞思想批判論の研究——『教行信証破壊論』の考察——」(一九九五)⁽⁷⁾、「真宗における宗論の研究

——浄土宗との諍論——」(一九九七)⁽⁸⁾

江戸期における浄土宗と真宗の論争に関する先行研究の嚆矢は杉紫郎氏(一九二一)であり、氏はほぼ時系列順に各論争の概観、考察を行っている。以後、浄土宗学の立場からは坪井俊映氏(一九八二)が、真宗学の立場からは結城令聞氏(一九八二)や深川宣暢氏(一九九五、一九九七)が研究を行い、杉氏が取り上げなかった史料を指摘するなどして論争史をより明確にしていた。

しかしながら、坪井氏は次のようにも指摘している。

昭和二十年の敗戦によって日本の社会は大きく変貌し、天皇制中心の封建社会は崩壊して、民主主義自由主義の時代となった。仏教研究の方向も大きく変わり、祖師と一般民衆、民衆の中における祖師の研究が盛んとなり、従来、浄土宗と真宗とが盛んに論争した法然門下における聖光と親鸞の地位に関する傍正、正異の問題とは異なり、て、親鸞の日本浄土教思想史上における地位について、新しい考えが真宗学者および日本仏教研究者の中より唱え出されたのである。⁽⁹⁾

坪井氏の指摘通り、思潮の変化に伴い、近世における論争は今日における問題とは殆ど縁遠いものとなってしまっている。したがって研究においても関心が薄まり、様々な検討課題を残したまま今日に至っている、というのが現状であるといえよう。しかしながら、看過すべからざる問題も存在するのである。

《先行研究における論争の発端についての言及》

深川氏は、江戸期における浄土宗と真宗の論争について次のように整理している。¹⁰⁾

- (1) 真宗と浄土宗の宗論のほとんどは、浄土宗から起こされていること。
- (2) 多くは浄土宗・鎮西派との諍論であること。
- (3) 全体的に浄土宗門内の縄張り争いの様相が見えること。
- (4) 歴史とともに、宗風・行儀に対する論難から教義・安心の論争に移行していると見られること。
- (5) 教義論争の基本は他力義・回向義にあると見られること。
- (6) 主題は「一念・多念」、「来迎・不来迎」、「三経（願海）真仮」というところに集約できること。

この深川氏の指摘の中で(3)～(6)に関して異議はないが、「(1)真宗と浄土宗の宗論のほとんどは、浄土宗から起こされていること」という見解には賛同しがたい。深川氏は、この論考において基本的に杉氏の研究を継承しており、それに従って論争の発端となった書物を挙げている。

その中では浄土宗側に発端を求めるものとして①『聖徳太子日本国未来記』、②『親鸞邪義決』、③『翼賛遺事』、⑦「大日比宗論」をあげるほか、真宗批判が行われている書物として『選択集文前講義』『挫僻打摩編』『吉水清濁弁』の三書を示している。一方、真宗側に発端を求めるものとしてはわずかに⑤『茶店問答』を挙げるのみである。

その『茶店問答』に関しても深川氏は次のように評している。

浄土宗と真宗の間の宗論は、そのほとんどが浄土宗の側から起こされてきたといっても過言ではないが、例外的に真宗側から始まった宗論が、次の『茶店問答』によって起こった論争である。——中略——本書は本来は平易に真宗を説くのが目的であって、もともと浄土宗を論難する意図はなかったものである。しかし著者が住所とする小石川には鎮西派・聖罔が開いた伝通院が存在するし、また自宗が正流であることを述べ、宗風には理由があるこ

とを示せば、おのずから浄土宗を貶することとなって、安永八年（一七七九）ついに浄土宗側から『茶店問答弁証』二巻および『付録』一卷が出されるに至った。^①

氏は『茶店問答』は論難を意図した書物ではなかったと評する。氏の説に従えば、近世における論争はほとんど浄土宗による一方的な論難によるものであって、真宗側はその被害者のような印象さえ受ける。しかし、果たして本当にそうなのだろうか。

本稿ではこの深川氏の主張に対し、各論争の発生過程を再検討し、反証を行っていきたい。

2 / 各論争の概要とその発生過程について

2-1 / ① 『聖徳太子日本国未来記』をめぐる論争

先行研究において江戸期における浄土宗と真宗の最初の論争とされているのが、この『聖徳太子日本国未来記』をめぐる論争である。

『聖徳太子日本国未来記』は慶安元（一六四八）年に開板された書物で、奥書によれば摂州四天王寺の宝庫より発見されたものだとする。その題名が記す通り本書は聖徳太子に仮託されたものであり、慶安元年以前にも多数の同名の類書が存在している。それら一連の『聖徳太子日本国未来記』群に共通する体裁としては、武家の台頭による公家の凋落、源平の戦い、元寇、南北朝の分裂などの太子在世より未来における出来事を予言し、それら世俗の乱れの原因は仏教の衰退によるものであると嘆き、仏法の再興を願うというものである。

慶安元年刊の本書の最大の特徴は、仏教衰退の原因として具体的に時宗の一遍、日蓮宗の日蓮、真宗の親鸞の三師の名前が挙げられ批判が行われている点にある。一遍、日蓮の両師に関しては紙数の都合上割愛するが、親鸞に関する

る批判は次の七点である。¹²⁾

一、諸仏を信ぜずもつばら一仏を信じる。二、諸法を修せず偏に一法を行す。三、諸僧を供養せず自作の法師に帰依し供養する。四、黒衣を着さず鼠毛の白衣を整える。五、戒律を受持せず女犯を許す。六、齋食を行ぜず肉食をし、仏寺を汚し神社を穢す。七、俗男俗女を集めて亡者を弔う。

以上のような批判がきっかけとなり、本書に対して慶安二（一六四九）年に『聖徳太子日本国未来記破誤』（著者不明）が著され、また同年に真宗の宗信が『止啼集』を、その後成立年は不明であるが同じく真宗の宗徳が『未来記一槌』を著している。

『聖徳太子日本国未来記破誤』は一遍、日蓮、親鸞の三師に対する批判すべてに反論を行っており、『止啼集』、『未来記一槌』は親鸞に対する批判のみに対して反論している。さらに次節にて取り上げる『親鸞邪義決之虚偽決』や『刑謗録』も『聖徳太子日本国未来記』について言及している。とくに『刑謗録』が『聖徳太子日本国未来記』の作者は浄土宗徒（鎮西派）である」と断定したことは、先行研究が本論争を江戸期における最初の論争として位置づけた要因の一点と考えられる。

もう一点の要因は『聖徳太子日本国未来記』の批判対象の三師が、浄土宗の傍流である時宗を興した一遍や、真宗を興した親鸞、法然に対する批判者であり安土宗論¹³⁾や武城問答¹⁴⁾での軋轢もある日蓮宗の日蓮であることから、批判者を浄土宗徒である¹⁵⁾と見做すのが自然であると考えられたためだろう。

ただし次節において詳しく触れるが、『刑謗録』の記述へ無批判に信頼を置くことに関しては問題がある。また『聖徳太子日本国未来記』における批判対象の三師は内容を見ると、「一遍……墮地獄道」「日蓮……墮餓鬼道」「親鸞……墮畜生道¹⁶⁾」として必ずしも並列的には扱っていないことが判る。いずれも「墮三惡道の教えである」という批判には違いないが、わざわざこのように分類する以上、その最大の批判対象は一遍である¹⁷⁾と考えるのが妥当ではないだろうか。

一遍が最大の批判対象であるとするならば、浄土宗徒とみなされる著者が、日蓮や親鸞を差し置いて、両教団史上で特に目立った問題も起きていない時宗の一遍を、そのように批判する理由について考察する必要があるだろう。

さらに『聖徳太子日本国未来記』の批判内容は、三師を祖とする時宗・日蓮宗・真宗が特徴とする一行専修・一仏帰依という思想や、伝統教団からすれば異質ともいえる宗風に批難が向けられているという点にも注目すべきである。特に前者の批判内容は法然の選択本願念仏説を継承する浄土宗教団にも他人事ではない問題であり、果たしてこうした内容であるにも関わらず批判者を浄土宗の徒と限定してもよいのだろうか。

これらの問題に関しては『聖徳太子日本国未来記』に対する各反駁書の内容考察とも合わせてまた別稿にて論じたいと思うが、いずれにせよこの『聖徳太子日本国未来記』を無批判に「浄土宗による論難」と見做す指摘には些か問題があると考えられる。

2-2/② 『親鸞邪義決』をめぐる論争について

『聖徳太子日本国未来記』に続く論争として、『親鸞邪義決』をめぐる論争がある。

寛文初め頃（一六六一）に流布した『親鸞邪義決』は現存していない。周辺資料より内容を窺う限り、法然伝の一つである『法然上人伝記』（通称『九卷伝』）の「一念義停止事」と内容が一致することが判る。ただし本書は『九卷伝』「一念義停止事」における、

成覺坊の弟子善心坊といへる僧。越後国にして専此一念義を立ける¹⁹
という一節の「善心坊」の下に「親鸞」の二字を加えて「善心坊親鸞」とし、親鸞こそが一念義の弘通者であると主張することを目的としたものと考えられる。

本書に対し寛文二（一六六二）年に真宗の帰郷子による『親鸞邪義決之虚偽決』が反駁書として著されており、また寛文四（一六六四）年には、同じく真宗の市隠子²⁰により『訶謗録』²¹が、半世紀ばかり遅れて正徳六（一七一六）年

には真宗の九々老衲(23)により『真宗流義問答』が反駁書として著されている。

『親鸞邪義決』の著者は不明であるがこの三つの反駁書は作者について言及しており、『訶謗録』によれば、

邪義決・未來記等為「偽書」。——中略——謂是鎮西派下之僧也。(24)

として『親鸞邪義決』も先出の『聖徳太子日本国未來記』も浄土宗鎮西派の僧の作であるとする。一方『親鸞邪義決之虚偽決』は、

作「親鸞邪義決」者。未_レ知何人_一也。然城北佛子曰。深信「親鸞邪義決」。而廣布_二於郷黨州閭_一者。其只西山浄土之僧也。(25)

として作者は未詳とするものの、この書を深く信じ流布しているのは浄土宗西山派の僧であると述べる。また『真宗流義問答』は、

真宗ヲ恣ニ謗ル。ソノ証拠トスル書物ハ邪義決トイフ偽書ナリ。是ハ寛文中ニ。紀州ノ総持寺トイフ西山浄土宗ノ寺ヨリ巧出タル邪書ナリ。——中略——邪義決返答ノ作者帰郷子。実名ハ玄覺坊トイヘル僧ナリ。予モ京都ニテノ学友ナリシガ。其此ハ和州吉野ノ辺ニ経徊セラレシガ。用事アリテ不図故郷紀州へ帰寺セラレケルニ。折節彼邪義決ヲ見ラレテ。即時ニ返破文ヲカカレシナリ。(27)

として作者を浄土宗西山派の僧とし、出所を江戸期における西山派の檀林寺院の一つである紀州の総持寺であることと断定している。さらに『親鸞邪義決之虚偽決』の作者と知己であると述べ、反駁書執筆の由来まで説明している。

これらを整理すると次の通りになる。

『親鸞邪義決之虚偽決』(一六六二)

『聖徳太子日本国未來記』

作者—言及なし

『親鸞邪義決』

作者—西山派

『訶謗録』(一六六四)

『聖徳太子日本国未来記』

作者―浄土宗（鎮西派）

『親鸞邪義決』

作者―浄土宗（鎮西派）

『真宗流義問答』（一七一六）²⁸

『聖徳太子日本国未来記』

作者―言及なし

『親鸞邪義決』

作者―西山派

この通り『親鸞邪義決』の作者については二説に分かれる。『訶謗録』の主張には根拠が示されていないのに対し、『真宗流義問答』は『親鸞邪義決之虚偽決』の西山派説を裏付けるような記述を残している。もともとそれだけで西山派説を認めることは出来ないが近世真宗の聖教目録である玄智『真宗教典志』は『親鸞邪義決之虚偽決』の項目では、

西山派梶取総持寺僧某、作親鸞邪義決一卷²⁹

として、恐らくは『真宗流義問答』の記述を基に西山派説を採用し、『訶謗録』の鎮西派説を退けている点は注目したい。実際の作者はともかく、少なくとも当時の真宗側の認識として『親鸞邪義決』の作者は西山派僧と見做していたということは指摘できるだろう。

鎮西派と西山派は同じ法然の流れを汲み、浄土宗の名を冠するが、当時から現代に至るまで、思想体系も教団組織も異なる別個の宗派であり、混同するべきではない。『親鸞邪義決』が西山派の作であるとしたならば浄土宗鎮西派教団と真宗教団の論争として語るのは不適切であろう。それは、『聖徳太子日本国未来記』をめぐる論争も同様で、作者が浄土宗徒、あるいは鎮西派とも西山派とも判断し得ないというのが現状であり、これら二つをもって浄土宗からの論難、あるいは鎮西派からの論難とする深川氏の主張は認めがたいのである。³⁰

2-3/③ 『翼賛遺事』をめぐる論争について

江戸期における論争において、初めて明確に浄土宗側からの論難によつて発生した論争と言えるのがこの『翼賛遺事』に端を発する論争である。

『翼賛遺事』（一七二九）の著者、義山（一六四七～一七二七）は浄土宗典籍の校訂や、『法然上人行状絵図』の注釈書である『円光大師行状画図翼賛』（一七〇三年）の編纂者として知られる学僧で、この『翼賛遺事』は『円光大師行状画図翼賛』編纂後、義山がさらなる資料収集を行つて得たものをまとめたものである。³¹⁾

この『翼賛遺事』の中に一念義の成覚房幸西について記されたものがある。ここでは幸西と綽空（親鸞）が、建永の法難の折にともに越後へと流罪となり、その地で念仏の興隆に励むも、やがて二人は捨戒し、法然の教えを捨てたために門下から排されることになつたと記される。その後の幸西は還俗して織田大明神社に婿入りし、その十八世の後胤にあたるのが織田信長であるという説などが述べられるが、この説の根拠となる史料について義山は「右成覚房嗣系者、出于津田氏某之元」とするのみで定かではない。³²⁾

当然問題となつたのが、綽空こと親鸞が幸西とともに越後に流罪となり、やがては捨戒し法然門下から排されたという記述である。この『翼賛遺事』に反論するものとしては、法霖（一六九三～一七四一）による『弁翼賛遺事』（成立年不明）がある。

法霖は真宗本願寺派の第四代能化、すなわち学頭の立場にあり、当時の真宗を代表する学僧である。この『弁翼賛遺事』は、義山の主張は事実無根のものとする史料批判に中心が置かれている。

この論争に関しては深川氏を始め、先行研究が指摘する通り、浄土宗側が発端の論争とすることに異議を挟む余地はない。また『翼賛遺事』の記述の背景には先の『親鸞邪義決』をめぐる論争の影響があることも疑いなくだろう。

2—4/④ 『円戒念仏一致章』をめぐる論争について

一方、こちらは真宗側に端を発する論争である。

真宗僧、祐應⁽³⁴⁾は享保一五（一七三〇）年に『円戒念仏一致章』を著し、浄土宗七祖・聖阇の『顕浄土伝戒論』に対して、浄土宗の円頓戒の相承を戒儀・戒法を重視する「難行自力」のものであると批判した。同書は、真宗義において「戒」とは名号の功德として自然に顕れるものであり、真信心の者は持戒不犯に執られる必要はなく「念仏こそが戒である」と説く。すなわち法然における円頓戒もこの「円戒念仏一致の義」として相承されたものであり、親鸞すなわち真宗こそがその正意を正しく酌むものであると主張した。

これ対して浄土宗より反論を行ったのが天台との即心念仏義に関する論争⁽³⁵⁾でも知られる学僧、敬首（一六八三—一七四八）の『円戒念仏一致章破文』（一七三八）である。本書は『円戒念仏一致章』の主張を、破戒を正当化するための論理に過ぎないと断じて、「円戒念仏一致の義」に対する教義的な批判ではなく、そこから展開される肉食妻帯等の真宗の宗風に対して批判を行っている。

この論争は深川氏が取り上げていないが、真宗側が発端となったと論争であると明確に指摘できるものの一つである。

2—5/⑤ 『茶店問答』をめぐる論争について

さらにこちらも深川氏が指摘している通り、真宗側に端を発する論争である。

真宗の秀円⁽³⁷⁾は明和五（一七六八）年に『茶店問答』を著し、茶店を舞台に尼僧と女性客の問答に仮託して真宗の教義宗風に関する二九の問答を設けた。それに対して浄土宗の普濟道人⁽³⁸⁾が安永八（一七七九）年に『茶店問答弁訛』を著して反駁を行っている。

先述の通り深川氏はこの論争について、「平易に真宗を説くことが目的であって、もともと浄土宗を論難する意図はなかったものである」と評している。確かに『茶店問答』は『真宗流義問答』等からの抄出が多く見られ、それら

を平易な表現に改めたいわば入門書的な特色の強い書物である。そのような書物に対して浄土宗側の『茶店問答弁訛』が批判の矛先を向けたことについては、反駁書『茶店問答弁訛』が次のように批難する。

又其弁訛ヲ書ケル者ノ。先ツ度量ノ狭小ナルヲ謂ハ。今家ニ梓行シテ世ニ広布スル。漢文和語ノ抄物数十部アルヲハ閣テ。中ニモ茶店ノ茶話ナルモノヲ探リ―中略―吾真宗ヲ折伏セントハ。猶シ螢火ヲ仮テ金剛ヲ銷セント欲スルガ如シ。³⁹⁾

すなわち「真宗に論難を行うためにあえて『茶店問答』のような書物を選んで批判を行ったのではないか」という指摘である。事実がそうであるならば、深川氏の主張も肯くことができるだろう。

しかし拙稿において、『茶店問答』における他書からの抄出ではない、独自の主張について考察する中で、本書が浄土宗の教義を「諸行本願」と評し、法然の教えに背くものであると批判している点に注目した。⁴⁰⁾『茶店問答』の主な抄出元である『真宗流義問答』は浄土宗も、真宗も、西山派も、全て法然の弟子が開いた宗派であるとして同列的に扱う一方で、同じ法然の弟子であっても成覚房幸西の一念義や、覚明房長西の諸行本願義は邪義であると断じている。しかしながら『茶店問答』は、浄土宗を諸行本願の邪義であるとし、真宗こそが法然の正意を継承する唯一の宗派であると主張するのである。⁴¹⁾

これはまさしく論難と言うに値するものである。このような主張に対して浄土宗側から反駁が行われるのは必然と言わざるを得ないだろう。

2-6/⑥「宗名論争」、⑦「大日比宗論」

この二つの論争は近世論争においても特に大規模なものであり、紙数の都合上詳しくは別稿にて改めて論じたい。ただし本稿考察に関することのみ簡潔に記しておく。

「宗名論争」⁴²⁾は、安永三(一七七四)年に東西本願寺から寺社奉行に対し「一向宗」の名を改め「浄土真宗」とい

う公称を願ひ出る『口上書』が提出されたことがきっかけとなっている。寺社奉行は、寛永寺と増上寺に対しその可否を問ひ、浄土宗の増上寺は『故障書』を提出し、「真」の一字による両宗の混同や真偽論争の危険性などを理由に不可と答申した。しかしその後も決着は着かず浄土宗、一向宗（真宗）ともに「我が宗こそが浄土真宗である」という主張を繰り返し、幕府による沙汰によつて論争が沈静化するまで十五年の歳月を費やすこととなった。深川氏は論考において、この「宗名論争」を取り上げているにも関わらず、論争の発端となったものを論じる際に何故かこれを除いている。⁽⁴³⁾「宗名論争」はどう見ても明らかに真宗側が提出した『口上書』が論争の発端となっており、真宗側に端を発する論争に数えるべきであろう。

「大日比宗論」⁽⁴⁴⁾は長州大日比（現・山口県）の地を中心に行われた論争である。発端は大日比三師の一人、浄土宗の法岸の著作に対し、文化八（一八一一年）年、真宗門徒の中野玄蔵が真宗義をもつて書状で批判を行ったことがきっかけである。法岸は玄蔵に対し反論を行わないまま翌年寂した。しかし玄蔵は反駁がないことを誇つて、周りに吹聴したため、文化一二（一八一五）年に弟子の法州が師に代わつて『正邪不可会弁』を著し玄蔵へ反駁を行った。その後も両者間で往復があつたほか、真宗側の清珠、潮音、常音、観道などといった学僧も巻き込んだ論争へと展開されていくこととなる。

深川氏はこの「大日比宗論」について法州による『正邪不可会弁』が論争の発端であると述べている。⁽⁴⁵⁾しかし経緯を見る限り初めに論難を行ったのは真宗側の玄蔵であり法州はそれに反駁したに過ぎない。したがつて深川氏の指摘は適切ではないと考えられる。⁽⁴⁶⁾

3 / 各論争の発端についての再整理

前節における私考をまとめると次の通りになる。

- ① 『聖徳太子日本国未来記』……作者を浄土宗と断定する根拠はない。
- ② 『親鸞邪義決』……作者は西山派であるというのが当時の真宗側の認識である。
- ③ 『翼賛遺事』……浄土宗側に端を発する論争とすることに異論はない。
- ④ 『円戒念仏一致章』……先行研究で取り上げられていないが真宗側に端を発するものである。
- ⑤ 『茶店問答』……浄土宗側に対する明らかな論難が行われており、真宗側に端を発するものである。
- ⑥ 『宗名論争』……両本願寺提出の『口上書』を論争の発端と見るべきである。
- ⑦ 「大日比宗論」……真宗門徒・中野玄蔵の批判を論争の発端と見るべきである。(ただし、要検討⁴⁷)

《論争の発端》

浄土宗側

③ 『翼賛遺事』

真宗側

④ 『円戒念仏一致章』、⑤ 『茶店問答』、⑥ 「宗名論争」

要検討

① 『聖徳太子日本国未来記』（作者不明）、② 『親鸞邪義決』（西山派か）、⑦ 「大日比宗論」

各論争の内容や発生過程を再検討してみると、明らかに浄土宗側が発端となっているといえる論争は③『翼賛遺事』

のみであり、むしろ深川氏の主張とは逆に真宗側にその発端が求められるものが多いことがわかる。仮に要検討とした三つの論争が浄土宗側に原因が求められるものだとしても、比率的には同程度であり、深川氏のように「真宗と浄土宗の宗論のほとんどは、浄土宗から起こされている」とは到底いえない。そもそも深川氏の主張は、論争の原因を半ば強引に浄土宗側に求めるだけではなく、『選択集文前講義』『挫僻打摩編』『吉水清濁弁』なども論争の発端となった書物として提示している点も問題である。確かにこの三書は真宗批判を行っている書物であるが、近世において真宗側からは反駁は行われず論争へは展開していない。論争へ発展していない単なる批判書も提示するのであれば、浄土宗側だけではなく真宗側のものも提示しなければ公正とはいえないだろう。深川氏の主張は、あたかも浄土宗側を一方的な論難者と決めつけるような恣意的な解釈が伺えると言わざるを得ないのである。

小結

以上、各論争の内容や発生過程を再検討してみると、明らかに真宗が発端となっているものが多いにも関わらず、これまで「論争の発生原因のほとんどが浄土宗側による論難である」という説が無批判に受け入れられてきた。

これは近世論争研究に対する関心の薄さを表す証左でもあると同時に、近世期における浄土宗・真宗の関係性がある種の印象論によって把握されているのではないかという問題も示唆するものである。

すなわち、江戸期において將軍家の帰依を受け幕府の庇護下にあったとも言える浄土宗教団と、中世から近世を通じて公権力に対し自治性を強く貫いてきた真宗教団という両宗の対比は「体制側」と「非体制側」といったような構図に置き換えることが可能である。そのことが「浄土宗による真宗への一方的な論難」、言い換えれば「体制側による非体制側の弾圧」とでもいうような平易かつ明快な先入観を作り上げ、自明なものとして理解されてしまった

のではないだろうか。今後も近世論争史の研究を通じて、江戸期における両宗派間の関係性の実体を明らかにしていきたいと考えている。

註

- (1) 本稿では特に断りのない場合、聖光房弁長を派祖とする鎮西派教団を指す。
- (2) 近世当時の公称は「一向宗」であるが本稿では真宗と表記する。また特に断りのない場合、東西本願寺派の総称として用いる。
- (3) 各論争に関する個別的研究については前田壽雄氏『親鸞邪義決之虚偽決』の研究（『龍谷教学』四〇、二〇〇五）、上野大輔氏「長州大日比宗論の展開」（『日本史研究』五六二、二〇〇九）、引野亨輔氏「近世仏教における「宗祖」のかたち——浄土宗と真宗の宗論を事例として——」（『日本歴史』七五六、二〇一一）、拙稿「『茶店問答』と『茶店問答弁訛』について——江戸期における浄土宗と真宗の論争における一考察——」（『浄土学』五三、二〇一六）、拙稿「『円戒念仏一致章并一念義両破文』について」（『浄土学』五五掲載予定、二〇一八）等があるが、ここでは論争史全体を取り扱う研究のみを取り上げる。
- (4) 杉紫朗氏「真宗対浄土宗論史の梗概」（『六條学報』一二〇～一二二号、一九一一）
- (5) 結城令聞氏『浄土思想 結城令聞著作選集』（春秋社、二〇〇〇、収録）
- (6) 坪井俊映氏『法然浄土教の研究』（隆文館、一九八二、収録）
- (7) 深川宣暢氏「親鸞思想批判論の研究——『教行信証破壊論』の考察——」（『真宗学』九一～九二頁）。
- (8) 深川宣暢氏「真宗における宗論の研究——浄土宗との諍論——」（『真宗研究』四二、一九九七）
- (9) 坪井俊映氏『法然浄土教の研究』六六八頁。
- (10) 深川宣暢氏「真宗における宗論の研究——浄土宗との諍論——」（『真宗研究』四二、八〇頁）。

- (11) 深川宣暢氏「真宗における宗論の研究―浄土宗との諍論―」（『真宗研究』四二、七一―二頁）。
- (12) 慶安元年刊『聖徳太子日本国未来記』（国文学研究資料館蔵）七丁表、裏。
- (13) 天正七（一五七九）年、安土浄厳院で行われた浄土宗と日蓮宗の宗論。
- (14) 慶長一三（一六〇八）年、江戸城にて行われた浄土宗と日蓮宗の宗論。
- (15) 杉紫郎氏も次のように指摘する。「其の真の著者と其年代とは詳かならず、されとも時宗、日蓮宗、真宗を並へ破し浄土宗門の興繁を讃嘆するより見れば或は浄土宗徒の手に成れるものなるべし」（杉紫郎氏「真宗対浄土宗々論史梗概（続）」（『六條学報』一一二、七頁）。
- (16) 慶安元年刊『聖徳太子日本国未来記』（国文学研究資料館蔵）三丁表。
- (17) 慶安元年刊『聖徳太子日本国未来記』（国文学研究資料館蔵）五丁表、裏。
- (18) 慶安元年刊『聖徳太子日本国未来記』（国文学研究資料館蔵）七丁裏。
- (19) 『浄土宗全書』一七、二〇二頁。
- (20) 親鸞の法名は一般的には「善信」である。
- (21) 『真宗全書』五九、二頁。
- (22) 『親鸞邪義決之虚偽決』の署名には「帰郷子」とあるが、『真宗流義問答』ではその著者を「玄覚坊」としてしている。
- (23) 帰郷子と同じく匿名か。詳細不明。
- (24) 帰郷子、市隠子と同じく匿名か。『真宗全書』五九「解題」には、書肆録によると敬信という人物であるとされるが詳細は不明。
- (25) 『真宗全書』五九、一二頁。
- (26) 『真宗全書』五九、二頁。

- (27) 『真宗全書』 五九、四〇頁。
 (28) 『真宗全書』 五九、三九〇四二頁。
 (29) 『日仏全』 九六、一九〇頁。
 (30) ただし、『聖徳太子日本国未来記』において批判される「真宗の破戒」、『親鸞邪義決』において批判される「親鸞と一念義との関係性」という二つの問題は以後も近世の論争において一貫した主題となるものであるから、たとえ両論争が鎮西派教団と無関係であったとしても、重要な価値を有する論争であることに変わりはない。
- (31) 出版年は、跋文によれば義山没後の享保一四（一七二九）年である。
 (32) 『浄土宗全書』 一六、九六六〇七頁。
 (33) 『真宗全書』 六二。
 (34) 『円戒念仏一致章』奥書に「延浄寺在住祐應」とあるが詳細不明。
 (35) 福原隆善氏「江戸中期の念仏論争」（『浄土宗学研究』 六、一九七二）参考。
 (36) ただし本書は著者、成立年、内容に関して多くの問題を有している。詳しくは拙稿「『円戒念仏一致章并一念義両破文』について」（『浄土学』 五五号掲載予定）参照。
- (37) 詳細不明。
 (38) 詳細不明。大正大学蔵写本では作者は「孤立道人」となっており、江戸深川本誓寺に逗留の際に執筆したことが記されている。浄土宗の学僧の一人、大我（一七〇九〜一七八二）も「孤立道人」を名乗っており晩年は江戸に滞在していたため関連性が考えられる。
- (39) 寂有『茶店問答弁訛刮』（『真宗全書』 五九、一五一頁）。
 (40) 拙稿『茶店問答』と『茶店問答弁訛』について―江戸期における浄土宗と真宗の論争における一考察―（『浄土学』 五三、二〇一六）参照。

- (41) 『茶店問答』については引野亨輔氏による研究もあり、氏は『茶店問答』の用いる「自余ノ浄土宗」という表現に注目し、真宗のみを別格化する本書の主張は浄土宗からの反駁をやはり必然とするものであると指摘している。(引野亨輔氏「近世仏教における「宗祖」のかたち——浄土宗と真宗の宗論を事例として——」『日本歴史』七五六、七八頁)。
- (42) 「宗名論争」の詳しい経緯については坪井氏、深川氏先掲論文や、辻善之助氏『日本仏教史』九、近世篇之三などを参照されたい。
- (43) 深川氏は「宗名論争」に関しては「親鸞思想批判論の研究——『教行信証破壊論』の考察——」(一九九五)の方で詳しく考察しており、論争の発端について論じた「真宗における宗論の研究——浄土宗との諍論——」(一九九七)では軽く触れるのみである。
- (44) 「大日比宗論」については上野大輔氏「長州大日比宗論の展開——近世後期における宗教的対立の様相——」(『日本史研究』五六二号、二〇〇九年)が詳しい。
- (45) 深川宣暢氏「真宗における宗論の研究——浄土宗との諍論——」(『真宗研究』四二、七六〇七八頁)。
- (46) 「大日比宗論」については上野大輔氏が言及している通り、法州の師・法岸の日頃の布教に論争の淵源があると見做すべきではないかという指摘も受けるであろうが、本稿はあくまでも江戸期論争において半ば定説として受け入れられつつある、深川氏の論争史観に対する反証である。少なくとも、大日比宗論の発生原因を法州に求めるのは明らかな誤りであろう。
- (47) 同右。